

東南アジア地域におけるサウンドスケープ研究

—音の記述に注目して—

平成 19 年入学

派遣先国：タイ王国

紺屋あかり

キーワード：音環境、空間、コミュニケーション

対象とする問題の概要

サウンドスケープは、1960 年代末カナダの作曲家マリー・シェーファーによって提唱された概念「個人あるいは社会によって、どのように知覚され理解されるかに強調点の置かれた音の環境」である。サウンドスケープは「人間非中心主義」「生命圏平等主義」といった環境思想（ディープ・エコロジー）に基づいた概念である。サウンドスケープ研究では音の大きさや強さを測るだけでなく、音を「ある意味を含んだ現象」としてとらえ音の背景にある事象や音に含まれた社会性などについて考察する。

サウンドスケープ研究はこれまで、世界各地域をフィールドとして学際的な研究がされてきた。しかし、具体的な音の記述法や調査法などを含めたサウンドスケープ研究全体の流れについて書かれた論文は少ない。



様々な民族が集う Sunday Market

研究目的

これまで音に関する研究は、工学的な量的調査（騒音研究、音響心理）を中心に行われてきたが、一方で人類学、社会学、言語学、民族音楽学などの分野でも音の文化的側面に注目した研究が行われてきた。後者の多くがフィールドワークを手法とした調査のもとで行われた研究である。

チェンマイは日本における京都のように古都として有名で、タイの中規模都市である。日常的に聞いている京都の音環境とチェンマイの音環境とがどのように異なるのか、また観

察し体験した音をどのように記述するのかをテーマにフィールドワークを行った。

フィールドワークから得られた知見について

ターペー通りでは毎週末バザール(Sunday Market)が開かれる。多くの人でにぎわうバザールは、市民の生活の場としてだけでなく、観光客へむけたエンターテイメント性も含んでいる。以下はフィールドノートに記述したバザールの音環境である。

「通りから一步南に入った寺院の境内は想像していたよりも広い。生春巻き、焼きそば、タイ風野菜サラダ、竹筒に入ったフルーツジュースらしきものもある。ナンプラーの匂い、油の匂い、煙から香る魚や鳥の匂い。境内からでも表通りの音楽が聞こえる。クラシックギターの音、タイの古典音楽、盲目のドラマー達の演奏、チェンマイの若者の歌声、このバザールにはストリートミュージシャンがたくさんいる。実際の人数はそれほど多くはないのかもしれない。それでも多く感じるのは、絶え間なく聞こえる多様な演奏とそれに付随するかのよう



バザールのソーセージ売り

なぎわめき声も作用しているのだろう。楽器、声帯、スピーカー、マイクといろいろなものを通して音が充満している。しかしうるさくはない。屋台でアイスバーを購入する。パステルカラーのアイスクャンディー。注文する時に声を張り上げる必要はない。ターペー通りを東に進む。中央にはストリートミュージシャン、両側には露店が並ぶ。右側から鳥の声が聞こえる。チカチカと光るくるくと回る籠が風に揺られて鳴いている。玩具か何かだろう・・・英語だけではない。フランス語、日本語、韓国語、もちろん

タイ語、そして今聞こえたのはどこの国の言葉だろう・・・北タイの山岳民族の衣装をつけた子供がスピーカーの前でかわいらしくダンスしている。この曲は民族音楽なのだろうか、アップテンポな上に機械音も混ざっている・・・」

このようなバザールの観察からチェンマイの社会的側面がうかがえた。市民、観光客、少数民族とバザールは様々な人によるそれぞれの目的によって利用されている。その背景には世界的な市場経済の流れ、山岳民族の移住などいくつかの問題が含まれている。



山岳少数民族の衣装をつけた
土産物売り

今後の展開・反省点

今回のフィールドワークから両都市の音環境に類似性があるか、またどのような違いがあるかといったことを明らかにすることはできなかった。それはバザールを見たとき浮かび上がったいくつかの社会的・文化的問題を解きほぐす作業を経てはじめて、明らかになることだろう。

地理的な条件や歴史,文化,社会,それら空間を形成する要素全てがある音環境をつくっているといえる。また逆に,音環境によって操作され,形づくられるものがあるともいえる。今後は,そういった音環境の背景にある社会的要素や変容への意識も加えて調査していきたい。



ストリートミュージシャン